尾張名所圖會

後編

五

ル 4
3376
12

門ル4
號3376
巻12

門呂3
號258
巻13

尾張名所圖會後編巻之五

目録 葉栗郡

葉栗郡鮮
黒田神社
善龍寺
黒田古戰場
宝行寺
里小牧渡
玉の井古覧
及川古渡
伊富利部神社
大毛神社
意足居士
黒田里
一柳氏城跡
善光の古事
北方里
名産筏魈
養願寺
加茂明神社
割田絹
結城縞織屋の図
極樂寺
極樂寺廃跡
正徹法師黒田里に託居の図
剣光寺
舊善光寺古跡
北方渡
東郷侍從
玉の井里
玉井助重舊宅
開田氏古城址
佐手原御厨
榮泉寺
大野神社
法蓮寺
妙性坊
大日社
玉の井舊跡
念敬寺
三宝寺
大毛郷
光明寺
河田渡

宝光寺

葉栗人麿塚　小塞郷　小塞神社　小塞宿祢
尾関石見守　壽福寺　養蠶の図　妙光寺
石刀神社　宮田天王社　上郡田圃桑林　宮田杁
河沼舊郷　魚入天神社　文永寺　千間猿尾
草井大猿尾　名産年魚　村國里　曼陀羅寺
曼陀羅寺にて軍議の図　名産飛保茶　河俣上天神社
勝宝寺　運善寺　若栗舊郷　若栗橋
若栗神社　宇夫須那神社　八竜社　淺井骨接

葉栗郡

當郡ハ國のうちの乾の極なる地にて東西ハ長く南北ハ縮まり民部省圖帳に葉栗郡行程東西二十餘里南北二十二里七十歩とあるハ古制の六町一里にてしるしたるなり 天正十二年 北の方木曽川のかはらなる数十村を美濃に附属せしより今のごとくなり 其美濃につきたる地ハ羽栗郡とかきて葉文字を羽文字とす 四至東ハ丹羽郡に隣り南ハ中島郡に接し北より乾へめぐりて木曽川を境とし山なく平均なり 田畠多き郡なり

黒田里　岐阜街道の中島郡一宮の北西にあたりて同じ街道の村なり むかしの宿駅にて黒田宿といひし也 此北も小名を東宿北宿といへり 東鑑に建久元年十二月頼朝公上洛御帰の条に十七日丁酉黒田と見えまた同書建長四年三月三品親王宗尊将軍関東御下向の休泊を記したるなかに廿二日丙午晝黒田と見えたり 和歌の名所のしるしハ松葉集秋の寐覚等にみえたり 又こゝを松枝庄ともいひて西園寺殿の御領なりしが公経の大臣の時北山に西園寺を建て浄堂を創建ありしが其地資永朝臣の領なりければ此尾張の松枝庄と替地せしなり 増鏡に曰へる所の浄文ハさる地にも出つる 右大臣實氏

正徹法師黒田里の
託居の図

のたゞし甚又敵経公のわかれさおもしろのうき菱見語了事ありり
て源氏の中将ハいやしまじひまりし此山のほとりに世に
志ら浪はし此浄堂たてし名をば西園寺といふめりし所ハ
今の三位まけあるの館なりしをそのれ西松えぶしいふ
広小かくすひてげり　云云

夫木抄　くろ田の里　尾張海道宿次百首
霞もも今くるとんし波らる黒田の里れ夕やみれ　春議為相卿

くろ田といふ所にいるし人ころうのおしよりものくえすし人の今うき
浦ともの秋のよすうみておりとさくし我まうも見えさ所人に
見ひ申しておれいしふ浦と限うけようひてきるハおやめく
人も都にあり所くうりしと若心にとかくいさりりあくさめあとし
わうあるにたうきわきめるむらして秋の物語さしして吻ー著し
侍りしも数ありかうてやうく卯月にうりぬ此所のさる者もうし
ろも田面みて林ハ打ちらくいさ村中のくろ民の家所とかやうれ芦れ
かきかえさおりうなそのかけにかくさと蓮葦に門をさうう都より
打つまん折ふ旅人の足体挽の代も只此うきわの分申れがむうり通る
弱の足音も物さいりしき折もあえしかき田にあくるう田子の袖くに
うらひ我へ陸の耳かりうしきおし珍しきとろとせし庭の木下に
秋の来の秋のつに渓とかと

慰草
おもすり光りハ見せさうしろ色乃くろさ此里にさけろ秋花　正徹法師

同
それ染の黒田は菊と海街や夕をかけて袖めくまゆ　仝

夕やみも黒田の里の名なれば衛をまやうにえて此竹なる　加藤磯足

翔言を
明うら雪にくろ田の里の名も残らつ中れさ鬼かくすれ　市岡猛彦

黒田神社　黒田村にあり　当所の生土神として延喜神名式に葉栗郡黒田神社本國帳に従三位黒田天神とし志るせり　例祭九月九日　民部省圖帳に黒田明神神田三十五束外以海鮮食鹽為貢皇極二年三月初行神禮神霊者淀比咩命瀬織津比咩命二座也久我家相續以使祭之三月上丁日

一柳氏城跡　同村にありしは和田河内守築きて居す其後沢井左衛門雄重居し天正十八年一柳監物直盛に当城をうけ直盛慶長五年の秋伊勢國神戸に移りしのち廃城しかば織田伊勢守信安國藤より一時ハ山内但馬守盛豊と黒田の城代とせしよし尾陽雑記人物志畧等に見えたり

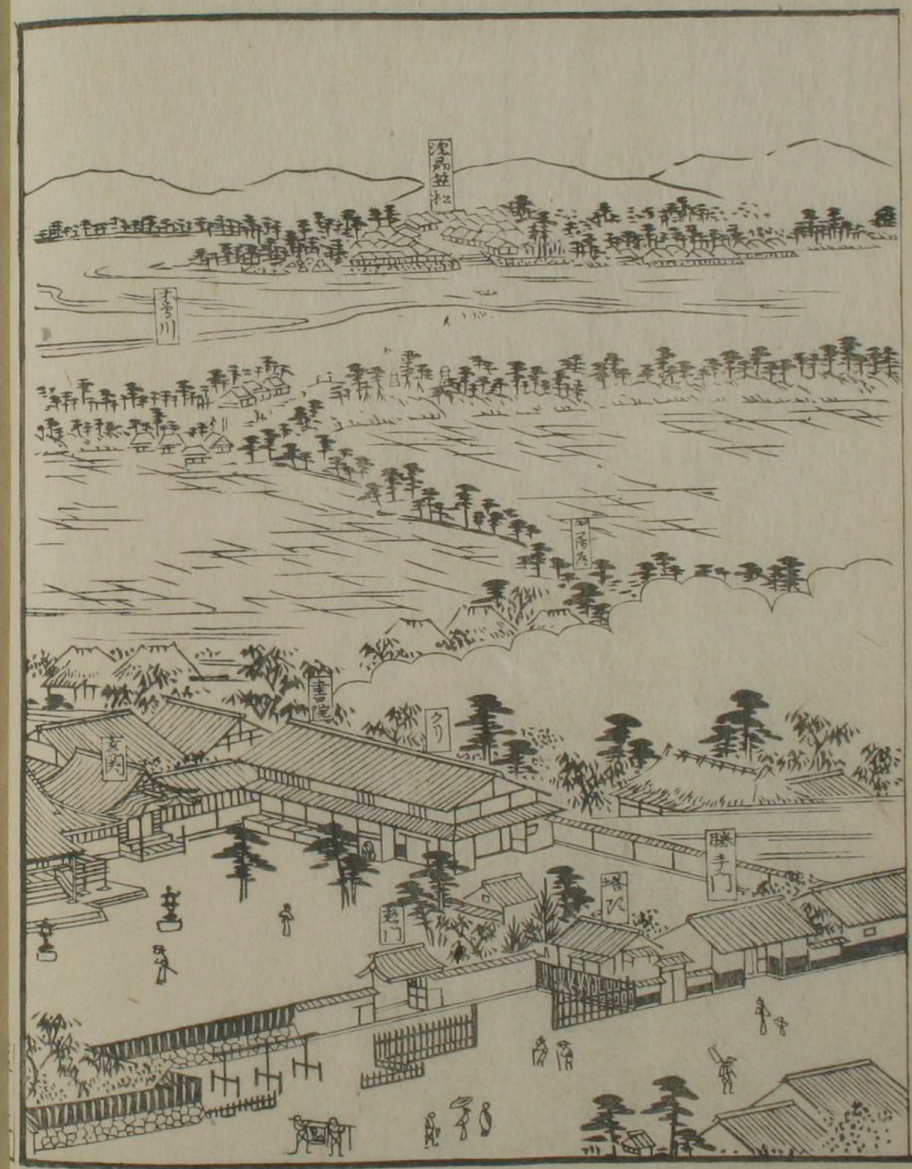
大德山剣光寺　同村にあり　頼朝公上洛の時当寺の地藏尊を拜し寺領と寄附し又剣一口を奉納せらる剣光寺の名ハ此剣によりて呼びけり　とぞ地蔵ハ行基の作なりけれバ他に盗まれ去りその後寺も廃しけりしを永禄三庚申年安和尚再興して今一宮の地藏を尊像とす是より六ハ当国六地藏の一にして彼岸纏まれの地藏なる　より慰草にすれくうるまし近きにかおもしき次地藏にまゐりき侍

善竜寺

養願寺

善光寺堂旧跡

笠松渡



如来善光を脊負て
黒田里と葬る図

のむりあ諸法なるゆゑわれひとりて日を分て法華三部の内の下の四日例の浄業に入り
たるに夕つかたあれば人もまゐりあつまりて念仏の業にはかりなる人も多く不断の番は唱かたうる
のあかりもきえくしらしらしとなるもすでに夜ふかしたるを見て人もまくに浄土
をもとむる人もやうやう明徳の軍の場にうせて形もなくうせ
浄土のいましけりとなれるかはいかんぞ哀は佛の
はからひ済度衆生の心寺来

瑞林山寶光寺

因村かわう條済度衆生の心寺来
当ちは古書に見えず荒刹なり

蓮美州室光禅寺花時之會而余不得預其席
後一日遇之主人求予詩欲雜諸彦之篇援筆
應厥命盈雪則室光之鎮守白山之廟号也

梅花元冬藏
盈雪廟前来和尊数篇細讀故人詩驚声未老有花
處聊折野梅添一枝

万里居士

若栗山河野善龍寺

因村かわう一向宗東流派
本山真宗河内九門徒の其一なり

寺傳に云当ちはもと
因郡河島にわたて専修坊といひ天台の道場なりしを親鸞
聖人あるを化導の初祐道と云る僧聖人に帰依し弟子となり
今の宗ふかくなりて祐道とりもつて岡山に本尊阿
弥陀の木像は行基菩薩の作と云伝へ且今も門を関東下
向の時はかるゝ沒当ちに寄とゝめらるゝ古例ゝ大谷遺跡録に

云羽栗郡 黒田善竜寺ハ古へ専修坊と云ふ河野九門徒の随一なり 聖人真筆の十字名号等を安置せり 志ふせり 河野九つ

後と云ふハ今号清水ふ属せり所も多けれども古へ云ふ南ふて共ふ栗郡のうち野り所偶大毛村栄泉寺北方村妙性坊美濃とて円城寺村西徳寺祇名寺竹ケ鼻村専福寺中屋村西入坊佐野村安楽寺印食村専光寺の八ケ寺に南ちとして

陳ふ忍ら南泉に御一南ふ来附ふ至蕃ふ移び聖人と称して日々化導にわづらはふ怒ふ

住ふり其後聖人上洛の時ふ九人の者波北ふ到り往後を慕ふ

を人ふ一幅で授与ふれ此名号を本尊一形ふ信心ふ改べしと云ふ

りれりかりけれバ其信仰地九つ後と云ふ

聖人号けりと云ふ

舊善光寺古跡 同村にあり今居光ち寺と云ふ畠中に古五輪一基を存せり

賀て本国信濃ふ帰りけるが黒田善光坊ハ此寺の阿弥陀如来の像を

小如来と安置して此坊ハ信濃ふ帰りける後庵に草鞋を刻立て其上

信濃まて乞ひ移ひしるバ此地と為て一寺を建立ふ如来善光と負て其上

び善光善助の像を安置ふ夏の像及

齋威ふ及び一も移りて新しく塵添壒嚢抄ふ見ふ文長けれども

略次其後異香山光照寺と云ふ小菴を建て同村善竜寺の末寺とせり

も今ハ廢

妙王山法蓮寺 同村ふあり日蓮宗甲斐国身延山久遠寺末明徳九壬子年

日妙上人の創建なり寺宝日朝上人修造の曼陀羅一軸

また日蓮上人の書豊臣秀頼公の和歌二首その外昔ふ云ふ元禄年中信日相

当寺ふ伝来せし信博識なりて著述多く中ふも法華経の技本ハ世に行はれて一

宗の綱白大ふ信用せらるまた和歌をたしなみ

せし信の外ハ仏祖統記ふ委しけれバ今に略次

黒田古戦場 同村にあり義満将軍の時土岐宮内少輔詮直と

後亡の畠田伊豫守満貞と合戦なり古跡なり 南方紀傳ふ

曰南朝の元中五年戊辰 北朝の応永二年ふ当る 八月畠田伊豫守満貞兄の

士岐康行が代官として都ふわるしが兄康行とうろうろ

恵所ふ立む事と望み謀をめぐらし後亡の宮内少輔詮直ハ

康行の聟なるふより また詮直逆意わるのむ祢と義満将軍へ

訴ふ事延引せバ康行詮直一味し満貞と合戦わ

ず然らば濃貞も同じ罪たらん事とうれ申次其故ふ詮直

勘気せらるに満貞に尾張の守護と為ふ是ふより満貞尾張ふ

もむくとある間詮直黒田ふて合戦ふ及ぶ康行も人数とつう

て満貞ハ討んと欲将軍ふ乞ひて士岐方を頼

盗に命じて康行を征せ云云 頼盗ハ康行が後亡なり明徳記ふ記とも同じ 満貞敗北の迹由ハ常

圓城寺渡
大日社
妙性坊
室行寺
金花山
大日社
書院
庫裡
鐘楼

ふるさと
高水の民
小本百川
たしぬるられ
うら玄
直特
木曽川
妙性坊
本堂
玄関
方丈
室行寺
本堂
玄関
茶所
鐘楼

樂記に嘉慶二年五月九日土岐左馬助於尾州黒田合戦場討死とあり

北方里 康正二年造内裡段銭并国役引付に壹貫八百七十五文伊賀美作守殿尾張国堀津北方段銭とあり堀津村は木曽川の向ひにありて今は美濃に属す

北方渡 北方より美濃の森嫁ち村への船渡しにて奈賀寺の渡しと云 この國君岐阜へ成らせらるゝ時この渡りを越させ給ふ

寂光山河野妙性坊 北方村にあり一向宗東派京都本山の直末なり河北九ケ寺の徒なり 當寺はもと天台宗にて同郡河沼(かいぬの)郷笠田(かさだ)村にありしが其後衰廢しけるを長国式部卿秀実出家して正念といひしが仁治元年子の年親鸞聖人東国より帰洛の節聖人の法徳に随喜(ずいき)して今の宗に改め終に河北九門徒の一となれり 大谷本源流派にも委しくあり

竜登山寶行寺 同村にあり一向宗東派京都本山直末の内陣一家なりもと真言宗にして文和元壬辰年頃正とて宗基なりしが文安三年石川左近大夫親康の三男近江介出家し休安と号しが時蓮如上人に帰依しけるに其時抜(ぬき)ありしよりて蓮如上人より休安の名号を授け寺号せり又古五輪一基あり是親康の五輪といひつたふ當寺の宗に改む又近頃弘化三年六月堂内へ雷落て本堂へかけ入が終に登天せずして消滅す其節の烟内陣の金襖にうつりておのづから雲竜の形ちをあらはせり筆にも及ぶ所にあらず是を雷画と号く実に一寺とす

名産筏鮠(いかだはえ) 同所木曽川にあり白きもののちいさきが初冬より早春まで寒水といふひて水の深き所ひは筏の下にあり川より居て奔流を凌ぎ又鵜鴨の害を避るところなるを網にてとり醤油にて煮るに生姜山椒など加へて曲物づめ或は桶に入れて四方に送る伊勢の桑名の志ぐれ蛤のおもし清潔にして味よし世人賞美せり

東郷(とうがう)侍従舊居 同村にあり幼名長谷川竹といひて信長公の小姓をつとむ成長して藤五郎秀一と名のる公横死の後秀吉公に仕ひ越前国東郷を領し従四位下侍従に任じ名を秀一と改む此人器量抜群にしてきらひなく直言を発して高貴の人をも憚る事なけれど世にけうされ人にあがめらるのち御当家に奉仕せしとぞ 太閤記 玉滴隠見等の諸記に見えたり

大日社 同所木曽川の堤(つゝみ)の上にあり小祠なれども老杉立そびえてあふぎみるにも大日如来を祀ると称するはいかゞなれども延喜神名式に常陸国大洗磯前薬師菩薩神社又美濃国池田郡弥勒菩薩神社などいふ例も多ければさのみあやしむにもあらず昔の頃ありて或る時大日と云ふ者此大日を崇めて人に越えたる力量をもちて人々を祈念しけるにいとも多くの力量をえて當村の左市といふ者にわかれし年の春左市川向ひ森嫁ち村の伯母が許に行けれは伯母難儀を訴へてあらんける加る様と五十餘枚を以て能くたふる也かれは伯母おそれて何ぞあるとて左市は此大食をしていひつけ是をもちてさる餅もなけれはことに此事なるとて竹藪の中に仕置つる事ありてみれば左市は大なる竹を二本立並べ根元より末まで縄にてしばりからげ共に繩もてはるかにゆひて又ある時左市に乱をなして木曽川をのりわたりけるに朝鮮人通行して起の湊にて舩橋かけ往来上下の舟はとゞめられば左市が

[illegible]

里小牧渡 里小牧村より美濃の笠松小牧の本宮川の舟渡し[illegible]笠松の渡し

横超山本誓院養願寺 同村小牧にあり一向宗東流京都本山直末の餘間一家[illegible]

[illegible]

玉の井里 今玉井村と云古跡ふる[illegible]玉の井の里玉の井の云ハ[illegible]

[illegible]

玉の井の舊跡 同村小字享保二年の秋当所賀茂社の林のうちとうらられ[illegible]

[illegible]

清泉涌出ル 古き本もち中水ふるき[illegible]

八橋の本今相模[illegible] 相州第相湖中の大杉いくも[illegible]信州松本[illegible]

[illegible]

賀茂明神社 同村小字 **創建の年月** [illegible]

[illegible]

山城の御本社と同じく世に[illegible] [illegible]

雷避の守札を出ス 別雷神[illegible]瑞籬 拝殿 御供所 神馬舎 古桟門[illegible]

[illegible]

玉井四郎助重舊宅 同村小字[illegible]東鑑曰元暦二年六月十六日丁

卯典膳大夫近藤七等為関東御使帯院宣巡検畿内近國成

敗土民訴訴云尾張國有玉井四郎助重云者本自為先猛

玉の井古覽
あくるとて玉井
の水をくみてこるとりもて
參議雅經卿
明日香井和歌集
おもひいでつやくるとこゝ内に
さしくみし紀ノまれぬ
袖の玉の井れ水

玉の井の里
加茂社

秋はあい
すゝとほさ山る
はあ山ふくら
あらゝふ
ふゆ
玉の井乃
水
磯足

くゝれい
きゝたむしの
井もこゝけ
こゝろに
こゝる
玉の井の
秋隆

悪令懐諸人愁之由謳歌近日殊又有違勅之科今日被仰助重云違背綸命之上者不可住日域依令忽緒関東不可黍鍾倉早可逐電云云

玉井山念敬寺

同村にあり一向宗東派愛染因幡ち村西徳寺末往古の開基詳ならず天文三年玉井四郎助重の裔孫の僧西慶中興す境内なる北林宗泉禅定尼の石碑ハ玉井氏の妻室の墓にて永正六己巳四月十九日と彫りつけたり

及川古渡

玉井村三ツ法寺村の邉の木曽川むかしの官道の船渡しありて今ハ磨まて里人の私にわたしのわたりを南及村北及村今ハ其法に存けり正徹の慰草にわたりたよりみどもあらじやうにこえすぎぬとあるし宗長手記に日しおはなを立侍り此所若堤を家居とし橋わりれもおびえのまま川落合まにの海ともいふべしとくと見えたり

覧富士記　をとりのくにたよひ川にて

りり君のめぐみやふかく及ひ川すむかたにまた幾の末ぞ　尭孝法印

割田絹

割田村あたりの諸村家々に綿絲絹紬を製し出す就中近年ハ結城木綿寛大寺木綿を織出す事多く昔より割田絹と称し上名物にす尾張国本封調絹九十匹云云新封調絹二十五足と見えたり正中二年に書写す尾張国解文にも調絹及び精好生糸を此国より貢献せしこと見え今昔物語にも尾張国ハもとより絹糸の名ある所まてよろづにもしるし

国基集　をとりの守にきこえまかすとて

をとりわたりのさとをまたるげをたてぬれおとるきぬのうすき　津守国基

開田氏古城址

同村にあり今田園となる開田二郎源国用又開田判官代重国等居住す国用ハ分脈系譜に木田又太郎重知の子のよしあり重国ハ平家物語盛衰記等の諸国源氏揃のうちに美濃尾張にハ開田判官代重国と見えたり

八劔山三室寺

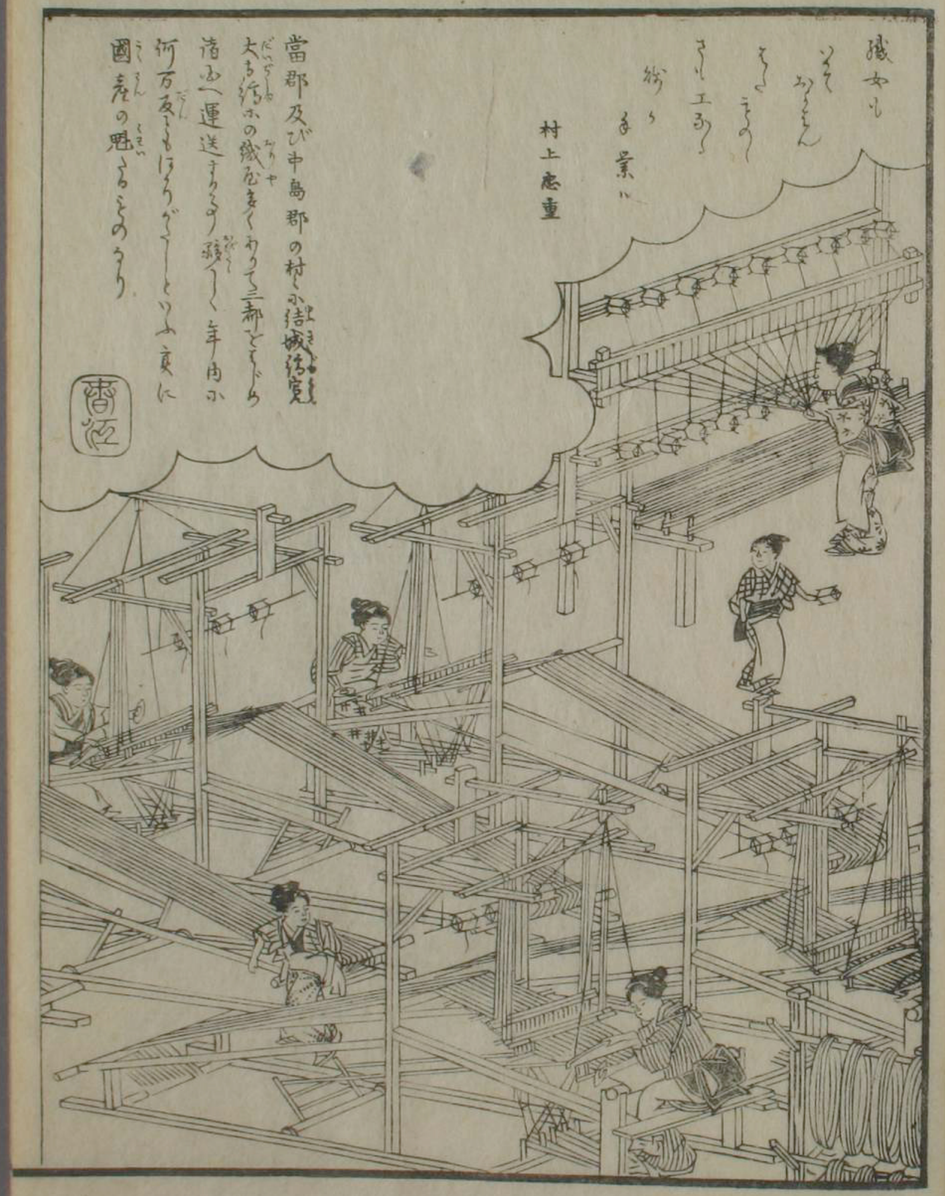
同村にあり八劔社ならびに旧くは神宮寺といひしよし松平君山翁いはく天台宗にて春日井郷野田村密蔵院末智澄大師築田の八劔宮とて今に勧請し又不動明王の像を刻みて当寺に安置此の不動の画像もありて弘法大師の筆なり

伊富利部神社

門弓村の支邑八幡村にあり同支邑福塚村及び黒田村の氏神なり

式内にて本國帳集説に伊富利部神社と当社に考定あり近頃ハ式の神号のことを唱へり元ハ八幡村の八幡とて国分寺と同じく諸国にある例にて巳前の行者などハかくのごとく諸国のおなじき常に諸国の諸人絶えずなんく詣ぬ国分寺ハ廃跡のみあるを当社ハ今も厳然と奥殿日々新にして神さびけることせるものはめでたきことなり其のち式の旧号にて復しね然ども猶わかりもあり天正十年黒田城主澤井左衛門尉再建すと云つたへたり今も当郡中の大社なるが往昔ハ社地更大にて門弓村をも八幡村といひしとぞ門弓以覚寺の阿弥陀の

結城縞織屋の図


織女の
そそのかん
そそ
さし工る
紡ぐ業い
村上忠重
當郡及び中島郡の村々小結城縞
大きなる織を多くわりて三部ずつ
清水へ運送するより殺くしく年内に
何万反もほりがてしとふ文に
國産の盛なるものなり

伊富利部神社

画像の裏書に享禄四年辛卯十一月廿八日尾州羽栗郡上門真庄八幡村福蔵坊とかきたり

末社 神明社 春日社 辨財天社 富士浅間社 神宮司社 貴船社 若宮八幡社

例祭 八月十五日 社人 林氏

佐手原御厨（さてはらのみくりや） 佐手原村をいふなり大神宮の神領にて神鳳抄に尾張国佐手原御厨とみえたり今はきちがひとよぶ又本国帳集説の一本に従三位坂手天神を当村なりといへり今もあげみの森にてかの古跡なりといひつたへ其御正躰なりとつたふる石もあり今は当村一向宗の浄蓮寺にいつるに太子石とて竪横一尺程にて目方十二貫目のまろき石なりこれ則彼宮の神躰なりといひつたふ俗にはお茶石ともいふ

大毛郷 今の大毛村をいふ大家郷ともかき又若栗郷ともいへるも同じ地なり和名抄に葉栗郡大毛とみえたる旧地なり

民部省図帳曰葉栗郡大毛公穀九百六十七束有餘假粟法性寺岡殿之舊領也哉以假粟充無粟之貢大毛川貢鮑鮎鮭等官家命國司之史部為乾魚

大毛神社 同村にあり 延喜神名式に大毛神社本國帳に従三位大毛天神とみえたり 一本に大筒ともかけり 例祭 八月朔日 九月九日 天子塚 ふくべ塚などいへるも同村にありて共に当社に属る古跡なり 当社は六所明神といひ又ひなぎの宮と称す蓋入姫の主なりし雛人形をさめしといひ傳ふ按るに景行天皇の御代雛人形といふ物あるべしともおもはれど今不離人形の事ハ姓名が昔書集にも委しく論したれバ爰に略せり

栄泉寺 同村にあり一向宗東派 京都東本願寺末 当寺ハ汀坐九門徒の一にして元ハ天台宗なり創建の年紀詳ならずといへども寺傳に白鳳六年栗本人麿の裔孫栗本源右夫國政草創し庵を山王房院と称し文和粟嶽と云其後嘉禎年中の住僧法瑞坊辞天親鸞上人に帰依し今の宗を改む其時名を教海坊了源と號ふ庵を姫所持の雛ハ元当寺にありしが大毛神社に納むといひ傳ふ

極楽寺 同村にありもと極楽寺村にありしを弘法大師の遺跡を選ばんとて近きころ伊勢松坂清光寺の信國上人此所に荒廃の旧寺ありしを惜み起し極楽寺と号く委しくは前編の名古屋極楽寺の条に見えたり

遍照山光明寺 光明寺村にあり天台宗 春日井郡熊田密蔵院末 天武天皇の白鳳六年の建立にて𡋽嚢抄に飛鳥浄御原御宇丁巳に乙中葉栗臣人麿始建立しそめの尼寺と名づけしよし見えたる古刹なりしが中古廃絶し其後再建せし寺なり

意足居士 同寺の縁傳にて軍業を好み兵書を暗記し神君徳川公に對話しましし時意足公の側に侍りしが徒君公の仰にいはく兵書を好み八幡太郎の傳を得たり我これと学ばんと思ふ源氏にありしが兵法の事は源家の裔孫なれバとて其傳を請たまへとありければ神君悦ばせ給ひ意足を深く賞し給ひてことごとく其傳を受らしめ意足が日ハ幡殿の傳を請ひめでたく上の家の宗と用ひたまへりとぞ

榮泉寺

梅谷

巖
殺る花や
今朝出し人の
高下駄

大毛神社
盧入塚
極樂寺

別話に元康の元の字を家文字に汝りたりしと云ふ 神君の浄書
天正十二年三月廿三日 御朱印 光明寺に所蔵 意足の由所の縁を神戸
伯耆守が一族の[illegible]

極樂寺廢跡 極ふち村にあり 後名古屋ふうして今南ち町の極ふち是なり 旧海の廢せ
を敬さて迫年大毛村に一寺を再興 極ふち
と名づけしがそれ洋の旧跡なり

民部省圖帳に葉栗郡極樂寺寺領四十八束有余以浦領為貢代法然上人三夏不出之縄室也と記る

大野神社 大地村 **延喜神名式に大野神社本國帳に從三位大野天神と記る官社なれど今は小社となる**

河田渡 河田村より名古屋川を越て灰塚の砦に攻撃勝利を得しなり 慶長五年八月廿二日冥加の軍兵彼年の秋と

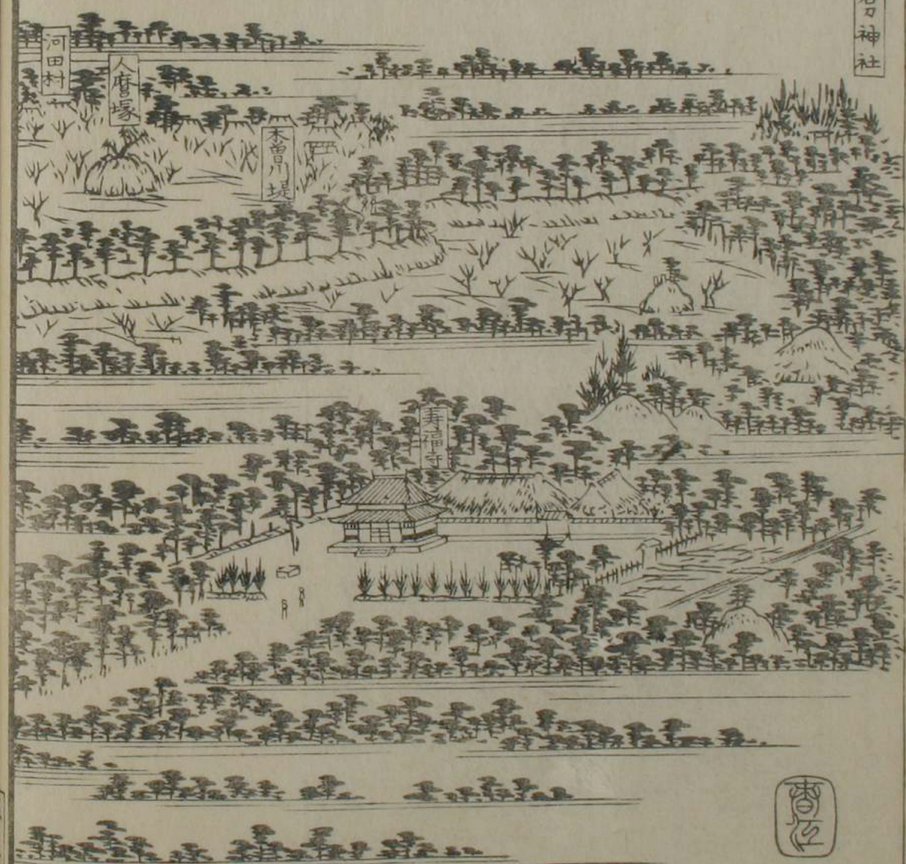
葉栗人磨塚 田村のうち四ツ塚と云地にあり其所古塚多くすり塚から上塚中塚
抵出しうしが其中に鍛冶砥石の[illegible]れ磨[illegible]しうし 大小十七八ヶ所あり其うち宝永三丙戌年十月此塚わりて石

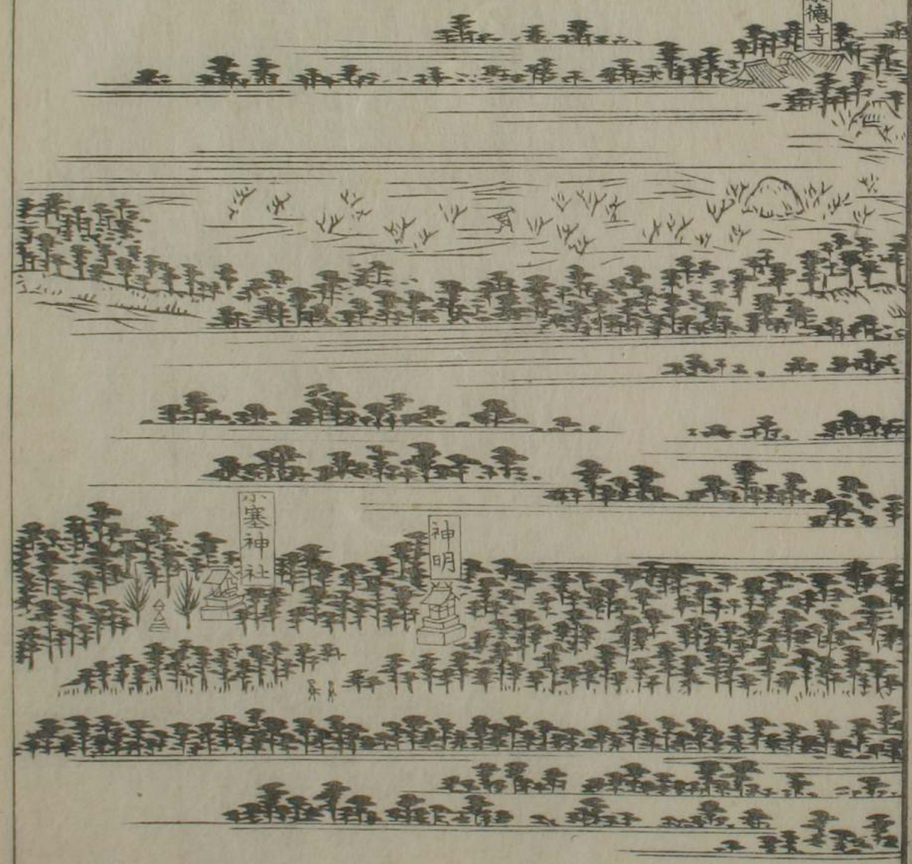
塩尻に葉栗郡河田村にて大川の程なき里の古墳とて大なる石棺を掘出しける 長九尺斗 横六尺斗 中に

剣の折れる鍬の古き銅のかすまりに似たる冷に似たるもいろ磁器の破
とてるもすしいろとい葉栗人磨の塚なり

小塞神社
人麿塚
壽福寺

東穂録に下野那須國造碑ハ城高野川北小野毛人墓河内石川郡春日村石刻大和宇知郡大澤村楊貴氏墓尾張景教郡河田村景教人麿墓ソノ他も亮き伴所及の初起の時寺寺





京株ヲ
ゆるまし
ゆ沢
初の旅ヲ
沙鳴

人麿ハ高市の住人なれとこの光明寺ハ天武持統文武の御世に相本人麿栗本人麿二人の朝臣なり相本ハ石見國人栗本ハ尾張國人栗本氏の祖栗本二人のひとまろ共に尾張百人一首一夕話に本名川の向ひの栗木村ハ其舊地なり栗本氏の里人多くこれを胡麻を紀なりとて球小崇敬し其夫神ともまろ

小塞郷（おさきのさと） 尾関村とよ和名抄に中島郡小塞（手世本）とあるこれ蟹郷なり むしハけなり中島郡につきなりなり中島郡なり

小塞神社 同村にあり 延喜神名式小小塞神社本國帳ハ従二位小塞天神

なる古社なり式及び国帳ともに中島郡なるハ此地なり

彼郡に属したるなり尾張本貫小塞氏の祖神を祀るなり

今ハ船着明神として小社なれども地内も廣く近々十村（佐田小目村大井手村小島村牛子西光坊中尾「稲小島」）物産なる社と酒麦振田氏ハ尾関石見守の末葉なるなり後に改めしなり今の氏なるなり

小塞宿祢 同村の人續日本紀に延暦元年十二月庚戌内掃部正外従五位下小塞宿祢弓張言弓張等二世祖遊之野庚午歳以降因居地名従小塞姓望請依庚午年籍改換

小塞蒙賜尾張姓許之と見えたり

尾関石見守 同村の人なり尾関大和守吉秀の末葉尾関新蔵なり其子六蔵なり又ハ

福島正則ふ家しなり新なりハ隠岐守と名あり六なりハ石見守と名のる

正則安芸の廣島侯に移りしなり所ハ父ハ一万石子ハ二万五千石と伝ふ石見守缺屋

なりしが武勇方人に秀でて世の評多し事蹟ハ岩淵夜話に委しけれ共変にわるしぬ

慈雲山寿福寺 同村ふなり黄蘗宗山城宇治萬福寺末寺寺創建の年月詳ならず

開山ハ唐僧なり山林廣くけなりなりての大地なり むり

國君ハ山にしてもなりなり山林廣くけなりなりての大地なり むり

今もけちの名あるしなりなりして寺の山林ハ河田村の男塚し地なりなりして古墳なり

小塞弓張等ヶ墳墓なるべし文化十四年
丑の秋も山をくずして石棺を堀出せり

万松山妙光寺 篠野村にあり臨済宗 京都妙心寺末なり 寺傳に文和三年相州洒倉香免ちの義海和尚草創天文年中妙心寺の笑溪和尚再建中興せしよしいへり 寺宝に古證文ありて
寄進妙光寺事合粟郡内野村篠野四至限東鎮守天神右寺領同住牌田等奉寄進當寺也若子々孫々之中致違乱頬者可為不孝之義也因可守此旨依寄進状如件
永和戊午四年九月十一日 橘康武とみえたり

石刀神社 篠野村にあり式内の社にして本国帳に従三位石刀天神とかける社なりとぞ此宮社は中島郡にあるべきを本国帳集説に当社なりとせし今は官社の列に入らず今も君を祭りて石姫錦にのらざりし甚ている説杭ありてより壱丁ほかなる木曽川のかぐに此菲の尾ありとりひあしかん岩あり或説に此社は美濃に属する中島郡石田村なりといへるも拾ふべきや

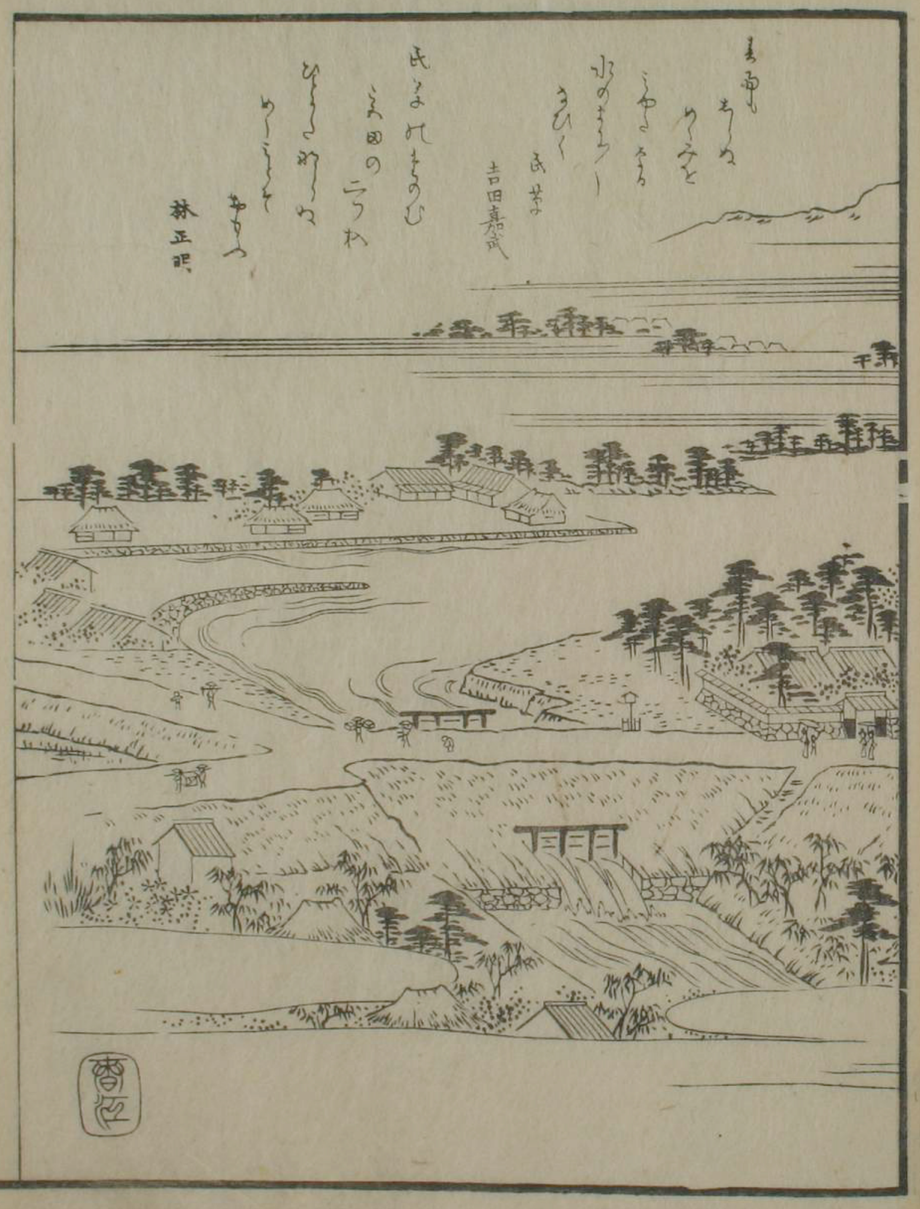
宮田天王社 宮田村のうち四ッ谷にありて宮田村の本主神とし次往昔当村の住人三輪某といふ者菜園某なるものこれを勧請す例祭は八月八日九日鼾噌湯の花田廿三日廿四日馬の塔献走を引当村のうち本に南北四ッ谷生原を組くにるを出陣に生の馬は三輪某より出す古例なりこれは当社を勧請せし家筋なればなり其余のちは八村中一統より牽かせさて三輪の先祖は元亀年中の人にて有道と号し此社保元元年修復の棟札ありしびつくていと婦るる宮地なり

上郡田圃桑木（かみごほりでんほのくはのき） 当郡及び丹羽郡の村民昔より村毎に蚕を飼ふ事多し此業とりしか貢の代に次ぎて田圃に桑を植しが諸村に多し此辺の蚕は信州の種としてこれ種は用ひず住民種を飼ひしめには天和年中信州上田にある宮下市之丞種に名ある者当郡宮田三輪某が許に帯留して種を伝へちかく是を目出ければ年々種を求る者数十人来りで之ぐもこれ三輪某が宅に逗留して是を伝ひ此三輪氏は前条に出る宮田天王社を勧請せし家筋にて旧家なり

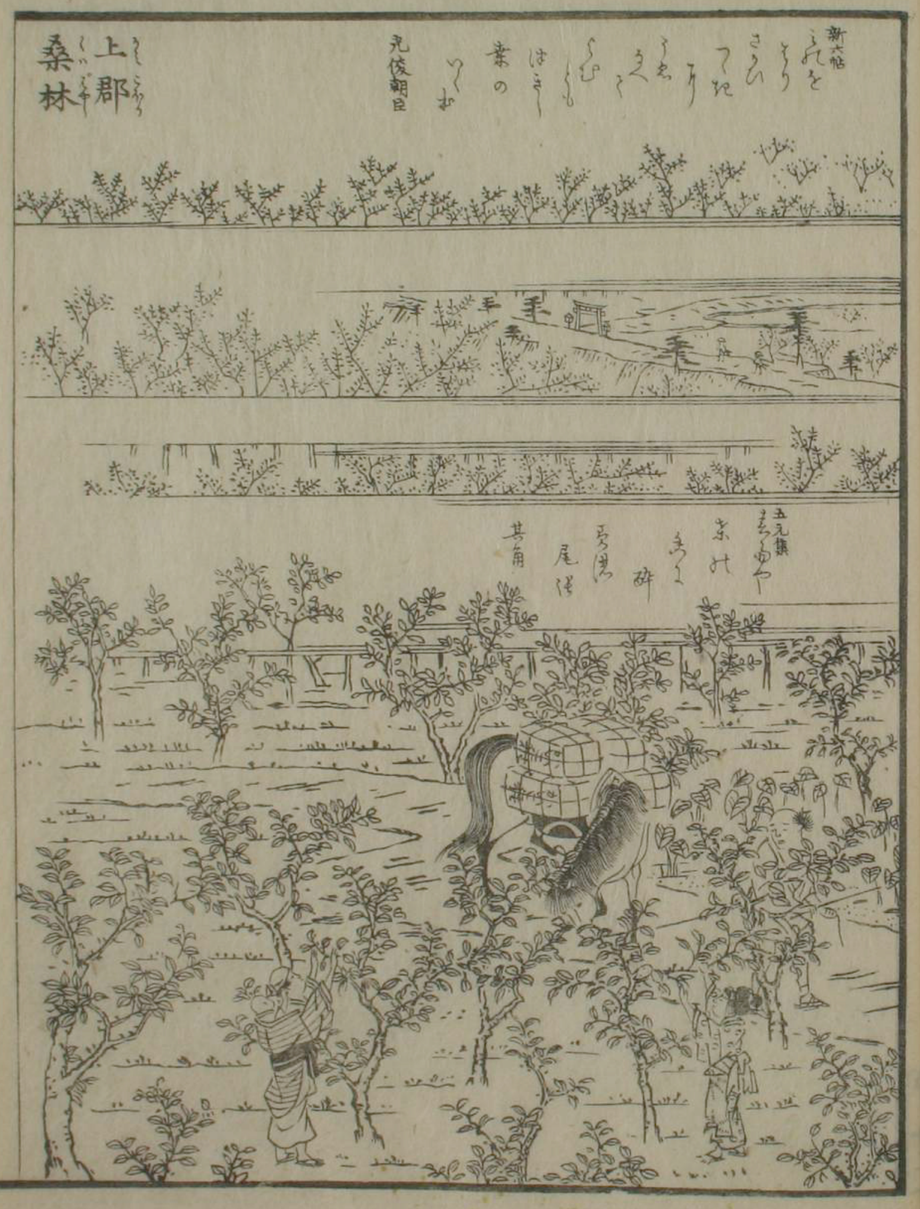
石刀神社

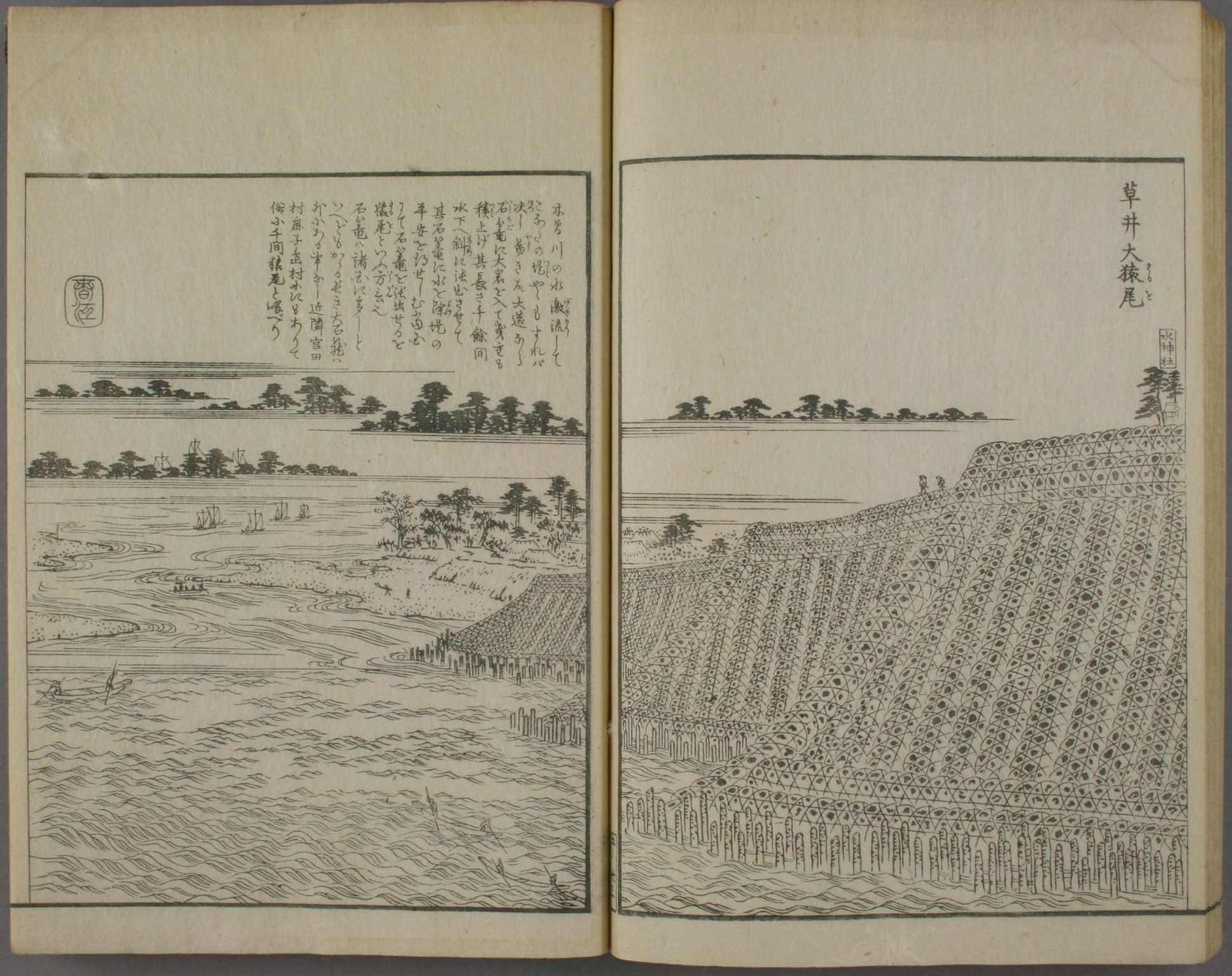
其二
製絲の圖

宮田
二ッ松
藤のさき
松ハ南村の西部にあり天正に宮田松と称し
木芳川の南岸に松二ヶ所をあせて彼川より
西南の方叡百村の用水となる中急流あるに
流れ入るもとより荒れ十四年大井村に松を作り
しが其松も廢し寛永五年より同十九
年まで松及び井筋出来るなり
武田八幡にあり車とおりけてうん
つき粉をまくときもろ〳〵の利用
ざかさしむ


吉田嘉成
林正明

宮田天王社
三輪氏


上郡桑林
新六帖
兄俊朝臣
五元集
其角
尾張
弓男
碎


草井大猿尾
水神社
水内川の水激流して
こゝの堀やもすれば
決し易きゆえ大造あり
石竜に大岩を入て築き
積上げ其長さ千餘間
水下へ緋に流出させて
其石竜に水を除堀の
平安を図せしむ因て
石竜を流出せるを
猿尾と云方云
石竜ハ諸国に多しと
雖ども此大石竜ハ
外にかゝる事なし近隣宮田
村麻子孟村にもあれども
俗に千間猿尾と唱へり

河沼郷（後瀬保村の地なりにあるて今河沼と云ひあり虎〜〜仙覚律師が河沼のなれるなりと云へり）

万葉集抄に尾張風土記を引ていへる葉栗郡河島社在河沼郷河島村奈良宮御宇　聖武天皇時凡海部忍人申此神化為白鹿時々出現有詔齋為天社云云民部省圖帳に河沼公穀二千五百六十七束有餘假栗一千三百九十五九貢糸綿班糸鞍馬具木竹之工又以牧馬充國司之拳云々

奥入天神社（小松村にあり今は熊野社と称す小松入る〜奥入の郡なるべし本国帳に従三位奥入天神と見へたり古社にて坂内に廣く闊の大樹あり）

法隣山文永寺（同村にあり臨済宗篠地村妙光寺末寺なるべし往昔はあるべしは禁裏供御料所にて租税のなき年々友吏来るごとに当寺の別院小宰右衛門と称して後世まハ真名代塚と号くと云今坊内にあり古塚これあり叔母寺ハ文永元年草創の地にて天台の天場山号と法輪山と云へり後鄰文字に改めしハ則税歛の因なりにて米舛邑の字畫なり名づくと云へり遠くて天文九年同郡篠地村の妙光寺二世松峯和尚を請じて中興とし今の宗ふあるべしいつれ

名産年奥（本名川にて夏の頃の名産年奥ハ犬山也にて八九月より奥と云ふ）

陸奥紙又きらわしとて紙漉山の下の早瀬〜〜草井村康子為村也の瀬毎にごるべし其細かなる駿〜〜茅花の芯生に似るべし

迫下次さぬ〜〜

漢人農人業百人と云ふ事を初て次川ゑと細き竹草もてたきて

村國里 今の村久世村なり和名抄美濃郡村國氏部省國帳に村國の漢字と見へたり村
くのゝ郷とかゝるもいとふるく暦應元年十一月十三日沙弥淨阿より尾張の目代に
たゝし古狀に國宣當國村久野庄大堂會米事云々と其後の物に村久世も村雲
くもかけるに村雲の里雅名なれど他に人のゆゝしきやまりて云々丹波國
大堂會の文に村くもの里と云々る例なれば此村久世も暦應の大堂會米の國宣狀曼陀
羅寺に所藏なる必ず大堂會にかゝる地名と心得るべし天正記にも
なるべき中納言と云人此所に流せり半ばこの秀吉の母の文なり云々
前編考智郡にも所村庄の家に見へたれば是に略次今也見るべし
日輪山曼陀羅寺 前光深村にあり淨土宗西山流京都禪林寺光明寺の西末寺本
朝六檀林の一所なり田舍の本寺なり紫衣著服免許
後醍醐天皇の元德元年 天真乗運上人鎮護國家のゝめに叡慮
をそゝぎ給ひ四福寺と號し寛正三年曼陀羅の瑞應ありて今
の山号寺号とし其後 後奈良帝の天文十年三月廿五日 勅
願の綸旨を下し給ふ開山上人は花山院内大臣師継公の孫にて
ゆゝしき筋目の人なりしかやうに御寄上野国善導寺の光
融和尚は浄土の血脈を授る袋中和尚の浄土血脈論にも乗運
を尾州曼陀羅寺云々と見へたり智德兼備し給る大德
にて康永三年六月十七日遷化を抑者山は郡中一の大地にして

堂塔僧坊甍をならべ常に称名の夢絶ぬ浄土の體相もまのあたり
にて無垢清淨の古名刹なり ○本堂 阿弥陀如来観音勢至の二菩薩の
像を安置し上人者ちを創建し本
尊造立の志願なりけるに折ふし洪水川流し三佛像流れ来り光明と
なるべきの西方なり 後花園帝の寛正三年六月十二日者山歩七世の住侶空光上人晨時の
勤行をなすに老尼一人入来り淨土曼陀羅の一軸を授て行く有像の者一人拝
もれば長く三悪道を免れなり我上人の信行を感じて佛菩薩まゝすゝ
ぬ上人ありやうゝ驚き見れば陸奥の八幡社の宮中へ入給ふと夢覚て曼陀羅をひらき
見れば大和国の當麻寺の古幅なりしかるに朝日彩堂内にまで入る曼陀羅
小脇ゝ愛相の光明赫々として眼彩の目を驚し給ふ故に欲表のわゝり別堂といふ曼
陀羅を切り奉り其時香盒の中より文殊菩薩の小像現し給ふ其像今猶佳
香盒の文殊と称して山号を改て日輪山曼陀羅寺と号す

鎮守八幡社 方丈の前の左の方にあり姫範家集に清ち八幡宮を改造し給ふ時西
の社に祝し給ひしをれもひもく
の社にかけ日ゝ所神者と市地の
ふゝをゝ ふけゝら三ゝ 鶯ひのわ

稲荷社 境内に

寺寶東坡芭蕉画洗周賛 一幅 朝鮮人筆西湖図 一幅

舜挙花鳥 三幅 牧溪繪 三幅 當寺縁起一卷 国祖君御著撰 同一卷 南与四十世の住持流溪姫範和尚の作

大三尊 顔輝筆 尾上形半鐘其外古画古書多く古證文数十通あり

曼陀羅寺

こゝは寛和八年の
庚大師の百年の
忌に当れるとて
きかりて云人〻に
ふるきをおもふよりつる
てとりあつる大和尚
をまくめおのれも
つゝあきことのむを
そのかゝそしくつて
ゆる新の寺赤子
つゝゝかゝとまりて
かゝらの立ゝ子け
いきうのゆめに
きけ奉ふゝふ
こゝあり

記て云ふ
神を志ゝ
百年の
春やむゝを
志の浪に
炬範

寺領　文禄四年乙未十一月朔日豊臣秀吉公寺領寄附の御朱印を給ひしより後并て元和六年庚申九月朔日　国祖君当寺鹿保村にて多くの知行を寄附ましまし

塔頭　慈光院　修造院　世尊院　真珠院　岩松院　竹竜院　梅揚院
正東院　東陽院　心政院　蓮法院　正法院　東林院

塩尻　兼栗の曼陀羅講寺は本州府北の古跡西山檀林の名藍なり宿春の遠きをはかりしをあらためて思ひ立志しけるをぎりまして色々ありしを竹葉の西堂此事は京都にまで来れ年々いさ知りたりしかどに論生の末波寂刹にまいりぬまさをおしていそ侍りし川嶋ちゝりて手形半紙し村畑主のかりて唯後よく待合生田川の名は疑波の名所とひとしく和寿まく昨年も懐かしけるを撲きしもさ家成のずぎさ称もなし

見もまたいかでか田の勝る　かくらひ移し曙の声

生田の社は之より北なる井上庄芝原といふ里にましませしを文治両年の頃仍経記をそむて従三位よりうせのまひや存りて黒金の里をそて古跡の墟を残せし如くそうし昔織田の始家左馬助敏信の一男伊勢守信安こゝに築きて居城とし本邑上四郷を遮止してしかるしく其息大和守信武惣見院の時お国と不和の事ありて永禄二年のやみ亡びられ侍りしおかそれり見とらりて品牧遠の新のくれをの羨のこを年く生荷るのをとらりぬさとは百花妍を争ふちまち久しき旅一丘阪を残して晩露行人の袖をぬらし旅人の世れ定めなきをもまたこれとわざらへられ侍りて

蕭々荒郭喚烏啾　人民城郭古今非
当時誰識烟條下　一片暁風柳絮飛

芝原村を左へ行高雄庄に入りぬ豪良といふ里の名呼りて桑林緑深し蠶養の業民多くある所なや栄盛の恩にてぞ貴きも賤しきもはぐくみとがくし荒をかさね侍るの家々におもひさすそうて天津罪人の類ひありぬ布の方は寄木へ御く伝わりとこそは稲置天神ましません作には天及し孫次大中津日子命は稲木之別尾張国別御神人

子母の哀いまさ一閑疏くなれバ是もまた侍りきしおもふ事わくに庭園多くなりてそも酩奴の産ありて鹿保に至り志し侍りし精舎に入る倉垠見にまく本尊物ふ見て涅眼清く山密にして麟鳳栖を門写けく九聖通次山門の前に神廟の製しかひし欒楼あり先正東軒にかゝくと案内し侍りしるはらくとそとてみきろやうてわられて大徹にまりぬ十余間の梵宮彩節巌に坊舎九十三院東西につらなり侍る膽仰して階とのぼれば長廊昼輝にして香篆烟接りて金界塵なくして磬音隠くより八尺来迎の聖儀三尊わぎやかにおませさせまふにやかくしく香を拈して九拝し奉るに悲歎の浪文流る

紺殿風回静玉炉　烟絶薫一傳弥陀佛他奈事云

三祖の真をおし当山第一祖天真乗運上人の像に謁次師は花山院内大臣藤原徳公の令子西山の正脈と伝へ名を一世にいかりし當寺を基して今猶ちと勝せる後醍醐天皇詩に紫袍と紹ひて恩米をかくしに輝き侍りしとや　光明院の康永二年六月十七日に示寂せり并七世空光上人の時寛正三年六月十三日異無ありて飯徳の変相を感得せりこれより日輪山曼陀羅寺と改号ありし　後奈良院天文十年三月廿五日　勅願の綸旨を下し官寺に列しまひし九は善峯の凤ならく檀林の花薫して負笈の学徒あまたと接す　さて曼陀羅堂に参り侍りし名は院主炬範出信偈として佛勝をかけしむちうくねしきつ渡るに丹青花清くして慈悲を顕さまさおもひ寄る聖国に向ひまするも因縁ふかく大慈大悲の尊容中の幸の禁にかけてもつくしがたし心のかりちりりとおもく侍りし是より方丈に到り院主と礼しやて書間を絶せしるのと辭す并に来る春しわきりわけなどをきさて宝庫の異像名画以下とおさしめこれを蔵宝又鈕床上に置て見るしめる西方三聖の大像は額輝の筆にして當山第一の什宝と其他思恭牧溪の画図并山大師恵心僧都の手筆兆殿司の涅槃像世に希有の霊像なりにふれとかぞふるにいとまあらず又高祖東漸大師讃の涛新してかくさき肖像ましませし又園台の中に造りたこめまつりし文殊大士は清ちの八幡の瑞籬より出現ありし異縁とかや相唐の大和の名家ある了年の辞見るに是せん且代々の綸旨武将の證章金界の榮を

曼陀羅寺軍議

岐阜攻の時諸侯
先鋒保の曼陀羅
ちゆ寺軍評議
わるし地田球波寺
入厠へ行き家老
某ひそふ屋へ
行やん私語ー
うバ輝政くるつて
座も伊勢守殿
きちつとわて行
四の後ろとこ伝
ちーとて受陀
敵ちの家伝
岩和尚其時
小伝そ
の終徒ゆーが
布の板ちもと
見ーとかとら見

勝寶寺

法螺の考を博す既にして院主の談産と毎月一行ありて

かくえんにいふ法ひ法の水ふるゝやせにちりもるさん

上人の之一に

法の水ふるゝの末もふるきえにむもふ繁りはよりかゝるまで

かゝて西東部ふ立ゆていこれ行ふ一やは日西にむふるふるんと庚門を動く此等

旬にむ之ふるゝもを之ひておろうあ芝ゝ之ゝ行ふは又ゝおゝふ心之比世と

永く思ふ挑ゝやうちんゝまでうはゝ立ゝの炎里にさ四ゝひて三業の羅と含ゝ行ふ

べき志ゝ又ゝがゝふるゝもれとうれゝゝやおもふゝるゝ水日の底ふ微き一考の考と

傾ゝ行ふゝて塵のふうる心地をすれ

名産飛保茶 前名保後飛保をのみを村

河俣上天神社 河俣村ふゝう今八剣社と称す 神と云る古社ゝり比比むゝは中畠郷ふ多ゝうゝ仏国帳ふハ

かゝゝ

ゝふゝ

平泉山勝宝寺 同村ふゝう一向宗東流京都本山直末にて沈家化ゝう寺ゝ

郡村の産ふゝて俗性ハかゝ集ゝう者ゝうゝ郡七門徒の一ゝて建長年中の創建 開山ハ魅離坊と云ふ

ゝまゝゝ七人のゝちゝて聖人の徳化ふ四ゝ行ゝゝて寺ゝを建立ゝう幼聖

人ゝ行ふとゝの聖人真筆の十字名号をゝ宝ゝゝう大谷き跡縁に羽栗郡河

畑勝宝寺ハ此郡七箇寺の其一ゝう中古浄門徒の子孫起立する所ゝゝゝあハ

いゝゝ徳ゝや詳ゝう沢

如来堂運善寺 大日比也村ふゝう一向宗東流京都本山直末 此郡七門徒のう

ゝふゝて往昔ハ天台宗ゝう此の徳性真表坊叡雲聖人よ

河俣上天神社

神杉の
高き梢と
ろろうて
上ぶき色か
夜ハ嵐ら音

矢部典則

五十三

五十三ハ
ゆるぎなき
茂りなり

言旭

西位〜今の京に改む当ちの入位坊の本縁ありこハ関東より至人の跡を尋ひのぶらるとしるけ所ろて病死せり位拾け縁を辿ミ跡をとゝひ侍人入位坊ハ北四葉戸十八常陸国大曹根常福寺の祖ありひちい至人旧跡の一ツて倭漢三才図會ニ見ゆ

若栗舊郷 重村のうち字和栗と唱ふ地ありと和名抄及び式部省図帳ニ葉栗郡若栗と見ゆる名の残りるなり

若栗橋 同村にあり若栗の旧郷の橋の名にのこりるなり

若栗神社 同村にあり今延喜八遠〜孫次

栗天神〜まるとり祭神

若栗明神神田三十有餘束光國司之受税和銅二年所祭饒速日命也〜尺〜〜 **社人** 北本氏ハ若栗神社の旧地にありりと若栗ニ遍照院といひて真言宗紀伊国高野山西方院のまうり〜ぶ右ありて室暦十三年より名古谷七ツ寺のまうるる南北及び宇夫須奈神社の祢勢少て久しき梵剌〜〜〜乱世小衰廃ニと考ふ今十年南西れ修理亮正吉再興して斎祀ル頃

若栗神社 式小若栗神社本國帳小従三位若

宇夫須那神社 同村にあり今延喜神名式小宇夫須那神社〜見〜

本國帳小従三位宇夫須那天神〜ゆる官社なり祭神ハ景行天皇の御むすめ五百城入姫皇女なり御母ハ坂入姫ハ尾張大海媛の御孫ゆれバ其縁なり皇女ハ国〜生れ給ふ

注式に尾張さるとニナニ社

うもれつゝ
いさゝ小川の
橋ゝ〜ら
いろ付くらせる
名と跡〜ゑ

忠近

宇夫須那神社

葉栗郡宇夫須奈社式内手力雄命と云るせるハ素神なれどいとれがわやまうとすべし行餘隨筆に西宮記を引て尾張国葉栗郡若栗郷ハ宇夫須奈神社あり廬入姫の誕生の地なり風土記ハ載るとあるとあらせうさんど普通の西宮記にこの事なし我妻本かわりやう考へ

八竜社 浅井村にあり府志ハ式内中島郡浅井神社とこの社とし既ハ本国帳集説ハも考へ迄より今郡ハ此ハ中島郡ハ延喜比あれハ此社を式内の神として

浅井村接骨醫師 同村にあり森林平と通称す此家ハ代々骨を療治ハ世に類ひ稀なる一家の事にて遠ハ遠国ハ近ハ郡内ハ医師の姓名を以もの稱して俗ハ浅井の骨接と通称せり

尾張名所圖會後編巻之五 終